

# ハイエクと進化

江 頭 進

## 序

本稿は、F.A. ハイエクの社会思想の中に見られる進化論的基盤に焦点を絞って考察を行ったものである。ハイエクの議論が進化論的基盤を持つことは、広く知られた事実であるが、それが興味深い特徴を持っているにも関わらず進化論単独で十分に研究されてきたとは言い難い。それは、第一に彼の社会進化観は自由主義論と密接に結びついていたこと、第二に進化論（特に社会進化論）そのものがいまだよく整理されていないことが理由としてあげられるであろう。第一の問題については、当然ハイエクの社会進化観と自由主義論を完全に切り離すことはできないので、それらをひとまとめにして取り扱う研究は正当であると言える。ただ、本稿では幾人かの他の進化論的社会観の支持者との比較を通して、ハイエクの進化論そのものを浮かび上がらせている。

第二の問題点に関してはまず今までの議論を整理、分類し、その中でのハイエクの位置づけを明確にすることによって、現代的な社会進化論の構築に対するハイエクの貢献を明らかにできると考えられる。今西錦司が指摘したようにそもそもナチュラル・セレクションに基づく進化論は生き残りの結果をもとにして淘汰の前の選択の妥当性を肯定しようとする一種トートロジ的な議論である (Hayek=今西 1979)。しかし、そのトートロジ的性格こそが社会の本質であり、われわれが言うことの限界であるとすれば、ハイエクの主張は社会進化論としては一定の正当性を持つことになる。

本稿では、まずハイエク以前の社会学者のう

ち、積極的に進化論の導入を主張したスペンサー、マーシャル、ヴェブレンを取り上げて彼らの中の進化論の取り扱いを考察している。第2節では、ハイエク自身の進化理論を考察している。特に、ハイエクは生物学的な進化理論の社会科学の中への導入には慎重である。これは進化論を用いて社会科学を再構成しようとする人々の中にあっては特異な傾向である。したがって、ハイエクの議論の一つの特徴となる。第3節では、進化理論と自生的秩序論の関係を考察した。そもそもこの両者は二つで一つのものであるのだが、これまでのハイエク研究では進化論的側面が軽視された議論がなされているように思われる。第4節では、ハイエクの結論と残された問題について取り扱っている。ハイエクによって社会進化理論はようやく整理された感があるのであるが、彼がすべてを終わりにしたわけではない。ハイエクの示したものはむしろ真の問題の入り口に過ぎないことをわれわれは認識すべきなのである。

## I 社会科学と進化論

ハイエクの進化論を論じる前に、まず社会科学の中で進化論がどのように取り扱われ、発達してきたかを概観しておこう。そうすることによって、「進化論」という言葉の定義を明確にし、ハイエク自身の進化論の位置づけが明確になると思われるからだ。マルサスがダーウィンに影響を与えたということはよく知られた逸話であるが、ここではダーウィン以降の社会学者、哲学者がどのように進化論を捉えてきたかに焦点を絞りたい。

進化論の社会科学の中への影響という点でま

ずあげられるべきなのは、スペンサーであろう。スペンサーは、次のように言う。「哲学的な政治家の間では、社会の進歩は一つの進歩であることの認知が、ひろがってきている。『憲法は作られるものではなく成長するものである』という、さらに一般的な真理の一部として見ることができる。」(Spencer 1864 邦訳 p. 223) スペンサーの主張は、当時の生物学での研究をいわば「素朴」な形で、社会に当てはめたものである。それでは、スペンサーのいう進化とは何か。スペンサーは、「進歩について」と題する論文の中では、それは生物、社会ともに「異質化」であるとしている (Spencer 1857)。「異質化」とは、もとは一つであったものが次第に種類を増し多様化することを言う。スペンサーは、これらの傾向は、生物全体の進化、種の変化、地球の生成からの変遷、美術の技法、言語の発達といったあらゆる分野で見られるとしている。特に社会に関しては、進化は分業の進展と同義と見なした。スペンサーは物々交換の発生以来の分業の進展と高度化を社会の発展として捉え、その中に「第一原理」である異質化による進化法則の貫徹を見る。またスペンサーは、ダーウィンの進化論に目的論的意味合いを導入したことで知られるのだが、これは彼の直後のデューイらの哲学者らによって強調された進化は一つの「終局的目標」に向かっているとする思想、「目的論的進化思想」の先触れとなっているとす点で注目に値するであろう。

さらにスペンサーの思想は進化の議論をする以前に進化する秩序の存在を前提としている。秩序を所与としながら社会進化を肯定的に捉えるスペンサーの主張は、ハイエクの進化概念とも共通点を持つのだが、これは後にデュルケムの激しい批判を浴びることになった点でもある。デュルケムの批判は進化の結果として社会はアノミー状態となるという彼自身の主張と結びついている (Durkheim 1893)。また、社会の構成要素自身の関係を秩序とよぶスペンサーに

よれば秩序の発展＝構成要素としての人間の意識の進化であったのに対し、デュルケムによれば本来個人の意識の産物であった社会的集合意識が個人とは切り離され、個人の意識を支配するようになるのであり、スペンサーの議論は、デュルケムのそれとは決定的に対立するようと思われる。確かに、スペンサー自身の用法からは秩序という言葉はかなり楽観的な響きを持つが、後に見るように、秩序という言葉の定義を広くとればあらかじめ秩序の存在を認めておく議論方法自体はあながち無理があるようには思われぬ。したがって、問題の焦点はそれらの進化を受容できるものかと考えるか否かにということに当てられることになるであろう。

スペンサーの思想は、様々な方面に影響を与えたのだが、特に社会進化論は、ヴェブレンやマーシャルの議論の中で重要な位置を占めることになる。まず、マーシャルは次のように言う。「(自然界と精神界における自然法則の作用の) 統一性とは、社会的有機体であると自然的有機体であることを問わず、その発展においては個々の部分の間における機能の分割の増大と、他方において個々の部分の緊密な結合が進行するという一般原則に他ならない。」(Marshall 1890 p. 241 邦訳 p. 158) この言葉からもマーシャルの経済生物学観がスペンサーの進化の「異質化」的定義に影響を受けていることは容易に推測できるであろう。そしてマーシャルの経済の進化についての概念はより明確である。彼は生物における種を経済においては個々の企業や個人であるとした。マーシャルは『経済学原理』の第4編第13章で、個々の企業の盛衰を樹木の成長と老化になぞらえて語っている。マーシャルは当時の社会で徐々に主流となりつつあった株式会社には必ずしも当てはまらないとしながらも、多くの産業における企業が経営者の年齢が有限であることから、常に変動の波の中にさらされていると指摘している。ここで注意しなければならないのは、マーシャルは自らの経済学の中で

人や企業が目的的に行動することを前提に議論しており、したがって進化する主体が目的的に行為する主体であることを認めていた。そして市場はより多くの利潤を得るという「選択条件」をクリアした企業のみが淘汰の過程を生き残れることになる。その意味で、生き残ったのは市場社会にもっとも適した企業であるとする結果論的な意味合いを持ち、これは経済進化と経済発展を結びつけた議論とともに、現在の新古典派的市場観の基礎となっていると考えてよい。しかし結局、マーシャルは淘汰の過程自体がどのようになっているかを示しておらず、彼の経済生物学も幾分弱い議論になっている。マーシャルは、経済学者のメッカは経済生物学の中にあるとしながらも、「しかし、生物学的概念は機械学的概念よりも複雑であり、そのため『経済学原理』の中では、機械学的アナロジーに多くを割くことになってしまい、またどこか静学的な意味合いを持つ均衡と言う言葉を使ってしまった。」(Marshall 1961, xiv)としており、生物学的思考がどのように取り入れられるのかということは明示されないままであったり。

さらに、マーシャルは株式会社の問題を回避しており、一人の経営者の死が企業の消滅とは結びつかないような場合は考えていない。また、大企業間の競争が常態となると短期間のある分野での競争の敗退が即、倒産を意味しない場合が多く、こうしたことから企業を基本進化の単位とすることは現代的な社会理解には必ずしも有効ではないと考えられる。

マーシャルの主張に積極的な評価が与えられるとすると、それは環境によってそこにすむ人間の性格が変わるとしたところではないだろうか。生物界における種の変化は相当な時間を経ねばならず、しかもそれは種類の多様化→環境による選択という過程を経るわけであり、そのままの種として環境に順応するわけではない。生物界では、適応しているのではなく一つの種の中から分化したいくつかの派生種のうちもっ

とも環境による選択に適合したものが主流派になるのである。それと比べて人間は生活環境に個体レベルで順応する。その変化は生物の種の変化に比べて遥かに早い。同様に経済における主体も生物と比べて非常に早く変化する。マーシャルはこの議論自体は生物学の成果からの応用であるとしているが、むしろ、これこそが社会と生物の違いではないであろうか。つまり、それらの主体は外的な作用である選択以外にも変化の形態を持っていることになるからである。マーシャルの主張は奇しくも生物学のアナロジーがそのままでは経済には当てはまらないことを示している。これは、マーシャルが影響を受けたスペンサーが純粋にダーウィンの進化論者ではなく、むしろラマルクの「用不用説」の積極的な支持者であったため獲得形質は遺伝しないという現在の生物学的な常識からは逸脱した議論となったのである。しかし、マーシャルの社会生物学はその後継者達には受け継がれず、マーシャルの体系の中のあいまいな部分として切り捨てられていくことになる。彼らの関心はマーシャルが生物学的アプローチの導入に至る前の簡略化として位置づけた機械論的な均衡分析へと収斂していった。

一方、ヴェブレンの場合は、マーシャル以上に進化論に基づいた思考が全体的に表に出ている。また、マーシャルと同様、当時の経済理論は静学的、機械的なものであり、それが現実の社会を描写しえないことを批判した。しかし、マーシャルと決定的に異なるのはヴェブレンが社会生物学のアプローチの入り口として、均衡論のような静学的機械的単純化を採用しなかったことである。そのため、理論の抽象化の程度としてはマーシャルには及ばないものの、その分進化論的要素が顕著になったのである。

井上義朗が指摘しているように、ヴェブレンの進化概念は、目的論的な意味を持たず、経済が自生的に徐々に変化していくことを表しているに過ぎない(井上 1993 p. 64)。「進化論科学の

根本原理、すなわち、その考察を常に根底において規定している前提概念は、累積的因果系列というものである。経済学における著者達は、自分達が没頭している現象を、そのような発展の法則下にあるものとして認識しようとする習性を持っている。」(Veblen 1900 p.176) さらに、井上はこの累積的因果性の概念がマーシャルの中にも見られることを指摘している。しかし、均衡論に依拠したマーシャルの議論が自由主義社会の肯定に傾くものに対して、ヴェブレンの描き出す進化的社会像は決して明るいものとは言えない。制限のない顕示欲こそが資本主義社会の本質であり、それを押さえ込むことが必要であるとする彼の議論は、進化論的社会観を持つ経済学者の多くが自由主義者であるのに反して、干渉を是とする結論を導いている。

ヴェブレンは古典派のみならず、限界革命以降の均衡論的経済学、歴史学派(特にシュモラー)などをすべて進化論に基づかない非科学的経済学として切って捨ててしまう。しかし彼自身の議論、例えば『有閑階級の理論』の中で叙述は決して理論的に一般化されたものとは言にくい。それ故、彼の卓越した観察眼にもかかわらず、数学的な抽象化が主流となっていく経済理論の中で彼の「旧」制度学派的アプローチは取り上げられることが少なくなっていく。

以上、スペンサー、マーシャル、ヴェブレンを取り上げるうちに明らかになったことは、社会進化論と呼ばれるものが、

(1) 進化は目的的吗否か。

(2) 進化するものは何か。特に生物学の成果の経済学への直接的な適応は可能か。

という2点で分類できるということである。(1)については、現在の議論では進化は非目的であるとするのが経済学でも一般的となっているが、進化を経済成長と結びつけて議論を行う者にとっては進化は目的的なものである。(2)の後半において、社会科学ではスペンサー以来、社会進化論では獲得形質も遺伝するとするラマ

ルキズム的な見解が主流となっていると見て良い。一方、これまでの議論の中でもっとも議論の分かれるのが進化の「主体」である。例えば生物学で言えば多様な広がりを見せ「異質化」するのは「戦略」である。また環境によって淘汰されるのはその「戦略」を採用した「群」とする説が主流であろう。スペンサーは異質化するものは(彼の使った比喻から考えると)職業そのものであり、したがって淘汰の対象となるものも分業化された個々の職業である。マーシャルは淘汰されるものは個々の企業であると考えた。ヴェブレンにおいては、進化(変化)するものは、人々の精神そのものであり、淘汰の対象にあげられるのは社会全体そのものである。これらの論者の差異や問題点をここで取り上げることにはできないが、ハイエクの中で、(1)(2)の観点かどどのように取り扱われているかということに注意することは有意であろう。ヴェブレンやマーシャルの例を見ればわかるように、これらの取り扱いの違いが同じ進化論の土壌の上でありながら、そこから導かれるビジョンに決定的な差異を与えている。ハイエクは進化論的土台の上に「自生的秩序」論を構築し、そこから自由主義論を展開した。したがって、まずハイエクの進化論がどのような性格を持つのかということ进行を明らかにすることは、本稿の中の議論のみならずハイエク思想全体の見通しをよくするために必要なのである<sup>2)</sup>。

## II ハイエクの進化論

それでは、ハイエク自身の進化論の考察に入ろう。ハイエクは進化を「伝達可能な変異と、よりよい生存機会を持つだろうものの競争的選択とを備えた複製のメカニズムが、時の経過とともに、構造体対環境・構造体相互の絶え間ない調整に適応した非常に多様な構造体を生み出す」過程と定義している(Hayek 1967 p.32)。つまり、この程度の進化なら時間をかけて変化していく存在ならば多かれ少なかれ持っている

性質であり、ことさら生物学での成果を規範とする必要性はないことをハイエクは指摘しているのである。このことは次の3つの意味を持つ。

(1) 社会進化に目的はない。さらにそれが「より優れた」社会に向かっているという主張はなされない（「進歩」との区別）。

(2) 社会進化の過程に一定の段階は存在しない。個々の文明はそれぞれ段階的に発展するのであるがそれぞれの発展の間には共通性がある必然性はないし、比較は基本的に不可能である。

(3) 社会進化における進化の基本単位は何かといった議論はなされない。つまり、生物における「遺伝子」にあたるものを探し、それを基本として進化を考えるような議論は展開されない。

ハイエクは、生物学的な比喩が引き起こしてきた様々な混乱を憂慮して、社会科学独自の進化理論を構築しようとしているように思われる（ただし、ウィットが指摘するようにそれは未完のまま残されている（Witt 1994 p. 187））。

進化の無目的性についてハイエクは次のように述べている。「進歩を個々人の努力、あるいは組織された人間の努力との関連で述べる場合、進歩はある既知の目標への前進を意味している。この意味で社会進化を進歩とよぶことはできない。というのは、社会進化は既知の手段を用いてある確定した目標に向かって努力する人間の理性によって達成されるものではないからである。」（Hayek 1960 p. 40 邦訳 p. 63）この一節でハイエクは、進化が人間が理性の視点から判断して望ましい目的に向かっているということは事前的にはいえないことを指摘している。しかし、このことは社会がより好ましい状況に向かっていることを否定してはいない。むしろ、ハイエクの考えでは社会は歴史的にみて生活水準という基準で見れば常に向上してきた。「イギリスの最貧民の方が南海の大王よりも高い生活水準を維持している」というアダム・

スミスの有名な言葉を借用する彼の議論では、貧富の差なども社会進化のための必要条件とされる。なぜなら、様々な新しい生活様式や生産様式が社会の隅々まで普及するのは、それらがまだ珍しいうちに経済的に豊かな階級に属する人々が進んで導入し、その結果価格の低下や技術発展がすすみ、より貧しい階級に属する人々が利用できる様になるからである。

ところで、ハイエクはこのような進歩が可能であったのは社会が自由であったからであると<sup>3)</sup>した。ハイエクの自由主義論を支えているのは、社会の様々な問題を解決できるのは社会の進化だけであるとする思想である。しかしそのような一見楽観的にもみえる主張は、むしろ進化そのものがコントロールできないものである限り、社会的な問題を理性の力によって根本的には解決することはできないとする否定的議論の裏返しである。そもそも、ハイエクが基礎とする社会進化論では、進化の方向を予測するというようなことは論理的に言えないはずであり、したがって「社会進化によって人々は今後より幸福になる」といった自由主義の積極的肯定につながる様な主張には繋がらない。確かに、自由の擁護をその著作全体において展開するハイエクは、各所で自由の効能をおおわせているがそれらはハイエク本人の心情の告白であるか、もしくは「過去において自由社会は人類に対して計り知れない恩恵を与えた」というように、過去について述べるという形を取っている。社会的進化論を単なる個々の主体の変化の際の性状として捉える限り、過去の結果から演繹的に将来を予測するというはその基礎的議論において矛盾を引き起こすことになるだろう。したがってハイエクの自由主義論を解釈する場合に彼の進化観を押しやることで、通常ハイエクの自由主義に対して一般に言われていることとかなり異なった結論が導かれることになる。ハイエクは物事を自由な成り行きに任せておくとまよく行くと主張したのでなく、進化そのも

のを制御できない限り結局のところ「見えざる手」にゆだねざるしかないことを述べたに過ぎないのである<sup>4)</sup>。したがって、ハイエクの議論の中に自生的秩序が自由を守るとする主張が現れるとするとそれは論理的に矛盾していることになる。

マーシャルなどは明らかに、マクロ経済的な成長を進化と呼んでいた。その意味で社会を構成する個々の主体の変化の総体を進化であると見なしていたといえる。それに対してハイエクは「文明の進歩」という言葉をしばしば用いている。しかし「文明の進歩」は歴史的にしか観察されないし、そもそも文明の発達を測る尺度などは決められない。ハイエクは、優生学や社会的ダーウィニズムに対する批判から、社会進化の過程が一定の段階に分割できることを否定している。進化の過程は一様ではなく、したがって西欧社会の基準から見ると遅れた様に見える社会もそれが時を経たとしても西欧社会のたどった道をたどるわけではないことを強調した。したがって、漠然と「文明の進歩」の研究をもって社会の進化を説明することにはならないであろう。そこで、ハイエクは「文明の進歩」をその文明を構成する人々の知識と集団を支える秩序の成長であると主張する。彼は秩序の形成と変化についての抽象理論こそが社会進化を描き出すことになると考えたのである。

『隷従への道』でのハイエクの焦点が、自由社会下での文明の進歩と干渉主義社会での文明の進歩の違いにあったのに対し、『自由の条件』では秩序の成長が問題の全面に出てくる。たとえば、「(一団の社会理論が明らかにしたのは) 諸人間の間の関係において、複雑で、秩序だった制度、しかもきわめて明確な意味での目的をもった制度がいかに設計に負うことなく成長したか、発明されたものでもなく、みずからが何をしているかを知らなかった人々の個々の行為から生まれたかということであった。」(Hayek 1960 pp. 58-59) おそらく、カール・メンガーの

『経済学の方法』の中の議論を念頭においてなされていると考えられるこの主張は、この一文に続く節と共に社会科学の進化論と生物学の進化論の違いを際立たせる<sup>5)</sup> (cf. Menger 1883 邦訳 p. 133)。ハイエクは、ダーウィンの進化論がマルサスのみならず当時の一つの流行であった社会的進化論の影響を受けていることを推測しながら、次のように言う。「残念なことには、あるのちの時期に、社会科学はみずからの領域でこれらの最初の成果に基づかずに、生物学からのこれらの考え方を逆輸入し、そしてそれらによって、『自然淘汰』、『生存競争』、および『適者生存』などのような概念を持ち込んだが、それらは社会科学の領域では適切なものではない。というのは、社会進化における決定的な要素は個人の物理的そして遺伝的な属性の淘汰ではなく、成功している制度や習慣の模倣による淘汰であるからである。これも個人や集団の成功を通して作用するけれども、あらわれてくるものは個人の遺伝的な属性ではなく、考え方と技術一要するに、学習と模倣によって伝えられる文化遺産全体なのである。」(ibid. p. 59)

ハイエクはことあるごとに基本的には生物学的進化論と社会進化論は無関係であることを強調している。彼はまず本節の冒頭で述べたような進化の過程(多様な種の発生→環境によるセレクション)は一般法則的に多くの現象に適用できるとしながらも、生物学的進化論はその一つのヴァリエーションに過ぎないとしている。ハイエクほど生物学的進化論の研究に熱心だった社会学者も他に例を見ないが、同時に社会科学における進化論の取り扱いが自律的であるべきであると考えていた。したがって、ハイエクの考える社会進化論とはダーウィンのものもラマルクのものも越えた幅の広い議論を許容する。

さらに、ハイエクの議論の中では、最近の一部の生物学者の間で見られるような決定論的な色彩が見られない。社会現象の客観的合理性を

否定し、事象に決定論的な説明を加えることを回避しているハイエクの議論は、「利己的な遺伝子」がそれぞれ最適戦略を選択し、(学校での成績が悪いといったようなことまで含めて)その表現型をすべて決定する生物学者とは一線を画する。例えばハイエクは『隷従への道』の中で、自由社会の持つ二つの可能性、自由社会としてのさらなる発展と干渉社会への墮落を描き出した。その両極端への道は最初はわずかにずれていくに過ぎない。

ポールはハイエクの進化理論の中に個人主義とホーリズムの間の「緊張」があると指摘した(Paul 1988)。つまり、自生的秩序が望ましいのはその中で、各個人が自らの選択にもとづいてよりよい状態に到達できるからなのか、それとも自生的秩序にしたがった「集団」が「存続」できるからなのであるかという問題が二律背反的に存在するというのである<sup>9)</sup>。確かに、ハイエクの著作の内『自由の条件』の中では個人主義的色彩が強いのに対し、『法と立法と自由』の中では、個人よりも集団の方に重点が置かれているように思われる。『隷従への道』は個人主義の重要性が強調されていたことを考えればハイエクの思想の変化として捉えられるかもしれない。しかし、私見では個人主義にもとづく自生的秩序の擁護と集団の保持からの擁護は必ずしも対立しないと思われる。なぜなら、ハイエクによれば、自由の恩恵は、自由に振る舞うその人に与えられるというものでは必ずしもなく、むしろ先人達の自由な行動の結果生まれた秩序にしたがって行動する人々に与えられるからである。彼は「市場秩序を維持したのは、その成功が模倣者を生み出した幸運な革新者であるよりも、新しい慣例を実践した何千人もの個人であった。」(Hayek 1979 p. 165)と述べた。人が自由に振る舞うこととその人が成功することは実は全く関係がない。自由の恩恵はあくまで秩序の形成を通じて人々に届けられるのであり、その点において個人もしくは集団というような

違いは問題とはならないであろう。

### III 自生的秩序と進化

ハイエクが自生的秩序を「人々の行為の結果として」形成されるものであると述べたことは周知の事実である。またハイエクの自生的秩序論の基礎となる知識論がマイケル・ポラニーの議論と酷似していることもしばしば指摘される。そこで彼の主張とポラニーの議論を比較することがここでは有意義であると考えられる。ポラニーの名著『個人的知識』は簡単に言うと科学とは何かということを主観主義的立場から考察したものである(Polanyi 1962)。しかし、この議論はハイエクが考えているように人間がなぜ社会的存在なのかという、より広い問題に拡張が可能である。

ポラニーの議論は科学は「分画化」していくという方向を持っているということの確認から始まる。しかし、単に一つの分野が複数の分野に分かれただけでは、その分画化は他の人々から認知されないし、それが科学の性向だなどということはできない。主観的な観察と分析が科学的であると言いうるためにはいくつかの条件を「分画化」と同時に備えなければならないと主張するのである。ある観察者が科学たりうるには、観察者が観察対象との間に形成する世界に対して、観察者が、ポラニーの言葉で「知的情熱」と「懇親性」を感じられるものでなければならない。

「科学は、その情熱的な旋律の功により、正確な様態の感情を喚起し付与する偉大な発話の諸体系の中に自らの位置を見いだすのだ。」(Polanyi 1962 邦訳 p. 124)とポラニーは言う。彼は、人間の知識が理性によって明確に捉えられている部分だけでなくその背後には明示的知識を支える莫大な意識されない知識、「暗黙知」が存在し、個々の断片的な観察事実を系統的に並べ替え科学的な一般性に適合させるのは、客観性を持った規範的論理などではなく科学者

自身が観察の対象とその位置づけに対する情熱なのであると主張する。観察された諸事象はそれ自体では相互の関連性を示し得ない。しかし、各事象間の分画化されていない知識を汲み上げ事象間に存在するクレバスを飛び越え、一見すると脈絡がないように思われる事象を関連づけ既存の体系の中での意味付けを可能にするのは、個人的な感情の一つである「情熱」だけなのである。なぜなら知的情熱は、事象を体系付け分画化しようとする「分画化されていない意識」だからである。観察者と観察された個々の事象はともに一つの知的基盤の上にあり、観察者はその知的基盤の上に観察された個々の事象を位置づけることによって、孤立した事象どうしを関係づけるのである。

ハイエクの自生的秩序論の基礎理論とポラニーの知識論はほぼ一致する。例えば、ハイエクが、「または、われわれがどう実践するかを熟知しているものを言葉で伝えあうことができないことが多いという事実は、多くの分野ではっきりと立証されている。それは、行為を支配するルールが、しばしば言語が表現しうるものよりもはるかに、一般的で抽象的であるという事実と深く結びついている」(Hayek 1976 p. 77)と語るときは、明らかにポラニーの議論を意識している。ただし、暗黙知的な議論は彼ら以前からしばしば見られる起源はA. スミスやD. ヒュームにまで遡れるであろう。そして、一つの社会が一群の暗黙知の体系として定義され個々の人間がその体系にしたがって行動し、さらに行為の結果としてその体系を再生産していると考えるとき、ハイエクが保守主義的な側面を持ちながら、なおかつ社会の変化を否定しないと云った言葉の意味が明確になるであろう(Hayek 1960 pp. 397ff)。つまり、社会を全体として特定の目標に向かわそうとする議論は有害であり批判されるべきであるが、社会が個人の有機的な結びつきによって支えられている以上、個々人間の行為の様式が変化すれば、全体

としても影響を受ける可能性はある(実際には、影響を受けるかどうかということやどのように影響を受けるのかということはかなり部分偶然に支配されるのであるが)。その個々人間の関係の変化が主観的に見て「理性的」に行われることもあるであろう。しかし、その変化が知的情熱によって今まで明文化されていなかった暗黙知の中から汲み上げられ明示化されたものであれば、基盤となる体系が破壊されないのであるから、社会全体に対して破壊的な意味合いを持つ可能性は少なく、むしろ長期的に見ればそれを受け入れた集団や個人にとって好ましい結果をもたらすことになるであろう。

人間の住む集団が暗黙知的な基盤を持ち、個々の主体が集団のノルムの上に自己投出することによってのみ自らの位置づけができることを認めようとする、社会進出を考えるためには主体とその主体にとっての環境の相互関係をもう一度考察する必要があるであろう。

#### IV 社会進化の三つのレベル

議論の混乱を避けるためにハイエクは「社会的」と形容される進化の基盤を三つの階層に分けている(Hayek 1979 pp. 159-60)。第一は、「生理的構造によって決定されるもので、遺伝的に受け継いだ、『本能的』動因という堅い、すなわちほとんど変化しない基盤」である。これは生物として「生存」を司る部分を指す。したがって、各個体間に共通なものであると考えられる。第二に、「個人が通過してきた連続的な社会構造物において獲得された伝統のあらゆる残存物」である。第三が、「これらの頂点に薄いルール層」があり、それらは「既知の目的に資するために計画的に採用あるいは修正される」性格のものである。淘汰の波にさらされるのは、ウィットが指摘するように第三のルールであるが、第一、第二の基盤がそれを支えていることは言うまでもない(Witt 1994 pp. 182-3)。興味深いのは、第一のものであり、個体差を越えた共通基盤を

設定することはある意味で、主観主義的方法と矛盾するのであるが、この基盤を設定することによって完全な相対主義に陥ることをハイエクは回避しているとも受け取れるであろう。

ポラニーとハイエクはほとんど同じ理論の上に立っていることは前にも述べたが、自生的秩序自体は、どのようなプロセスを経て進化するかという問題が残されている。ハイエクによると、社会進化とは秩序の形成に他ならない。この秩序自体には目的性はなく、個々の主体の日常の行動を社会的に位置づけるだけである。この社会的に位置づけるという自生的秩序の機能より具体的に不確実性の減少と費用の抑制と言いつけることができる。自生的秩序は人々の行動を暗黙的、明示的に規定する。もともと人々の行為の結果として形成された秩序であるが、いったん形成され抽象化がなされた秩序は今度は逆に人々自身の行動を縛る存在になるのである。これによって、人が他人の行動を、過去の事例を参考にしながら一定の枠の範囲で予測することが可能になるだろう。つまり、他の人が常識的な範囲で行動することが予測できるので、こちら側としても対応を決定できるようになるのである<sup>7)</sup>。また、自生的秩序にしたがって行動する限り、戦略の選択はパターン化される。このことは日常生活において選択肢に遭遇するたびに意志決定を行う必要がなく、そのための精神的、物理的コストを削減している。また他者に対する極度の警戒が不必要になることや、交渉の様式も一定化されることから取引や交渉にかかる費用も減少されることになる。このような暗黙的なルールに支えられる社会を外部から改変し「進歩」させようとしても、すべての構成要素にどのような影響が出るのかを事前に評価することはできないであろう<sup>8)</sup>。多くの干渉主義者達は外部から「調整」することによって秩序そのものを改良できると考えている。確かに水の流れの中に石をおくと流れは変わるであろうし、そこに新しい生態系が形成される可

能性はある。しかし流体力学的な計算がとてつもなく難しく、さらに人間社会のパターン形成の複雑さはそれを遥かに上回る<sup>9)</sup>。人が理性的に選択できるものはせいぜい第三のレベルのルールであり、逆に第二以下のレベルの基盤を改変しようとする、その上に立つすべての構築物を揺るがしかねない。ただし、変化はする。第二の基盤も変化はする。何度も述べたように、それが個人の行動と直接的に関わり合うものである限り、フィードバック的な関係を持つことは避けられないであろう。そして、その変化は第三レベルでの変化と比べると緩やかであることは想像に難くない。この変化は歴史の流れの中でのみ観察可能なのである。

#### 結びにかえて

先述したようにハイエクの社会進化理論は未完成のまま終わっており、その中から進化についての決定的な理論を引き出すことは困難である。しかし、われわれが目指さなければならないのは、ハイエクの主張した

(1) 社会進化は制度(秩序)と知識の進化として捉えられなければならないこと。

(2) 生物学的比喩は必ずしも適当でないこと。

という点であろう。経済学は19世紀から20世紀にかけて積極的に物理学、生物学の成果を取り込もうとしてきた。しかし、その結果社会科学というよりも自然科学的な装いをまとうことになってしまった。経済学が真に自律的な学問になることを望むならハイエクの指摘と目指していた方向は箴言として受け止める必要があるであろう。

#### 【参考文献】

- [1] Alchian, A.A. (1950) "Uncertainty, Evolution and Economic Theory", in *The Journal of Political Economy* Vol. LVIII, no. 3, June.
- [2] Durkheim, E. (1893) *De la division du travail*

- sociall*, (n.p.) (井伊玄太郎訳『社会分業論』, 講談社, 1989年.)
- [3] 江頭進 (1995) 「ハイエクと貨幣」, 『経済論叢』 vol. 156, no. 1.
- [4] Hayek, F.A. (1934) “Carl Menger”, introduction of *The Collected Works of Carl Menger* vol. 1 *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, (London: LSE).
- [5] Hayek, F.A. (1994) *The Road to Serfdom*, (n.p.). (一谷藤一郎訳, 一谷映理子改訳『隷従への道』, 東京創元社, 1949, 92年. 西山千明訳『隷属への道』, 春秋社, 1992年.)
- [6] Hayek, F.A. (1960) *The Constitution of Liberty*, (London: Routledge). (気賀健三, 古賀勝次郎訳『自由の条件』I, II, III 春秋社 1986, 87年.)
- [7] Hayek, F.A. (1967) “The Theory of Complex Phenomena”, in *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, (London: Univ. of Chicago Pr.). (杉田秀一訳「複雑現象の理論」, 『現代思想』, vol. 19, 1991年12月号.)
- [8] Hayek, F.A. (1973/1976/1979) *Law, Legislation and Liberty* vol. 1. 2. 3, (London: Routledge). (矢島鈞次他訳『法と立法と自由』I, II, III, 春秋社, 1987, 88年.)
- [9] Hayek & 今西錦司 (1979) 『自然・人類・文明』, 日本放送出版協会.
- [10] Hodgson, G.M. (1994) “Precursors of Modern Evolutionary Economics: Marx, Marshall, Veblen, and Schumpeter”, in *Evolutionary Concepts in Contemporary Economics*, ed. by England, R.W. (Univ. of Michigan Pr.).
- [11] 井上義朗 (1993) 『市場経済学の源流 マーシャル, ケインズ, ヒックス』, 中央公論社.
- [12] Marshall, A. (1890/1920/1961) *Principles of Economics*, 8th ed., 9th ed. (London: Macmillan). (永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター1985年)
- [13] Veblen, T. (1900/1961) “The Preconception of Economic Science III”, in *The Place of Science in Modern Civilisation and other Essays.*, (New York: Russel R.).
- [14] Paul, E.F. (1988) “Liberalism, Unintended Orders and Evolutionism”, in *Political Studies*, XXXVI. (浅野有紀・那須耕介訳「自由主義・意図せざる秩序・進化論」, 『現代思想』 vol. 19, 1991年12月号.)
- [15] Polanyi, M. (1962) *Personal Knowledge: Towards a Post Critical Philosophy*, (Chicago, Univ. of Chicago Press). (長尾史郎訳『個人的知識—脱批判哲学を目指して』, ハーベスト社, 1985年.)
- [16] Samuelson, P. (1973) *Economics from the Heart*, (Arizona: Thomas Horton and Daughters), 1973. (都留重人監訳『サムエルソン心で語る経済学』, ダイアモンド社, 1984年.)
- [17] Spencer, H. (1857) “Progress: its Law and Cause”, in *Westminster Review*, April. (清水幾太郎編『コント・スペンサー』, 中央公論社, 1980年.)
- [18] Spencer, H. (1864) *The Principle of Biology I*, (n.p.). (第3部の一部のみ八杉龍一郎編訳『ダーウィニズム論集』所収, 岩波書店, 1994年.)
- [19] Witt, U. (1994) “The Theory of Societal Evolution: Hayek’s unfinished legacy”, in *Hayek, Co-ordination and Evolution*, (London: Routledge).

註

- 1) ホジソンは、マーシャルは競争過程における、ある種の淘汰を考えていたことを指摘している。しかし、結果として代表的企業と均衡の機械論的概念によってその試みは覆い尽くされているとしている (Hodgson 1994 p. 16)。
- 2) 進化論的思想を捨象し機械的な均衡分析に集中してしまったことで、アルチアンや近年のエボリューションナリー・エコノミストから批判を受けることの多い新古典派経済学であるが、彼らは本当に進化論的基礎を必要としていないのであろうか。確かに一般均衡が成立した世界は全く有機的な感覚を持ち得ないのだが、一般均衡が成立するための前提と現実世界の接点を考えると、進化論的思想を抜きには語れないであろう。例えば、消費者や企業の合理的行動の仮定を根拠付けようとするれば、長期的に見て人々の行動が合理的な様式に収斂していくことを言わねばならず、その時には暗黙的にでも進化論的な意味合いを含ま

なければならなくなるであろう。そもそも市場経済による社会発展を考える際に進化論的思考を全く取り入れないですますことは、多くの困難(例えば、計算量の問題など)があるように思われる。新古典派経済学はその枠の内部では機械論的な議論を展開しているのだが、その前提には進化論的枠組みを含んでいるといえるのではないだろうか。

- 3) 後に、ハイエクは進化は進歩の十分条件ではないが必要条件ではある、としている。しかし、彼は次のようにも指摘している。「残念ながら、進歩はその量を定めることができない(経済成長も同様だ)。われわれがなし得ることはただか、進歩に有利な条件を創出して、最良のものを期待するだけである。」(Hayek 1979 p. 169)
- 4) サミュエルソンによると、フランク・ナイトは「資本主義を一残念ながら一われわれが我慢できる最善のもの」であると考えていた(Samuelson 1973)。これはフリードマンの積極的な資本主義社会の肯定と比べるとかなり消極的であるといわざるを得ない。そして、このナイトの立場はハイエクのそれとかなり近いように思われる。
- 5) ハイエク自身はメンガーの有機体的社会観の中に自分の自生的秩序論と同じものを見出したと言っている(Hayek 1934)。この言葉からだけではハイエクがメンガーからヒントを得て議論を発展させたのか、もともとハイエクの考えていた主張がメンガーの中にあっただことを再発見したのかはわからない。ただし、オーストリア学派的な思考法をとっていくと、社会を自身の力で徐々に変化していく有機体のように捉えるようになるであろうことは想像に難くない(cf. 江頭 1995)。ただし、ポールが指摘するように、ハイエクが「有機体」という言葉自体は「階層主義的で権威主義的な見解を支持するのに使われてきた」とし、後期になると自らは使用しなかったことも事実である(cf. Hayek 1979 p. 158-9)。
- 6) ポールは、この他ハイエクが理性による社会改革を否定するあまり専制政府に対する革命まで否定してしまっていると批判している。しかし、この批判はハイエクの議論を正しく理解するとあまり意味を持たない様に思われる。つまり革命で専制政府が倒れるのは、誰か特定の人物が革命を

したことによるわけではなく、専制政府に対して不満を持つ多くの人々の行為の結果として社会が変化するのである。その流れが急速であれば「革命」と名付けられるであろうし、緩やかであれば歴史的漸進的変化として記述されるであろう。もしそうでなければ、専制政府に対する革命とは名ばかりで、単なる権力闘争に墮してしまうであろう。

- 7) 市場が自生的秩序のこの性格によって支えられていることは言うまでもない。また、ハイエクの市場観が主流派経済学的な市場観と決定的に異なるのはこの点である。たとえば、東欧革命以後、旧社会主義諸国は競って「市場の導入」を試みたが、価格統制の急速な解除とは裏腹に満足に市場が有効に機能していると言える国は未だ少ない。これは市場が単に「交換の場」ではなく、「人のものは盗らない」とか「取引の時刻に遅刻しない」といった慣習や現場の暗黙的なルールから、商法、民法といった明文化されかつ強制的なルールまでを含んだルールの束として捉えられるべきであることを示している。
- 8) ハイエクの干渉主義批判は、たとえ政府が社会を「客観的」かつ「外部的」に見ることのできる立場としても、有効な政策を採ることはできないことを示したものであった。この批判は、現在の産業組織論が政府が第三者的な調整者の立場に立てるとみることなどを考えるといまなお有効であろう。これに対して、政府は「外部」にたつことすらできないことを指摘したのが、ブキャナンであろう。ブキャナンはハイエクの影響を強く受けていることを自他と共に認めているが、私見では、両者の議論の方法には大きな違いが見られるように思われる。
- 9) これは物理的な流体の動きが単純なルールに支配された構成単位が無数に関わり合うことによって複雑なパターンを形成するものであるのに対して、人間社会は複雑なルールを持った主体が無数に関係することによって複雑なパターンを形成するものであるからである。ハイエクは「複雑現象の理論」の中で社会現象を単純系的な議論に還元してしまう統計学的手法を批判している。「しかしながら統計学は本性上、大数の問題を、複雑性を無視し、その数える個々の諸要素を

## 論 文

意識的にあたかも体系的に関連していないかのごとく扱うことにより、処理する。統計学は個々の要素に関する情報を、どれほどの頻度でその様々な特性が個々の要素の諸クラスにて生じる

か、という度数の情報に取り替えることにより、複雑性の問題を避けているのである」(Hayek 1967 p. 29)。

### Hayek's Evolutionary Concept

Susumu EGASHIRA

This paper deals with F.A. Hayek's theory of evolution. It is well known that F.A. Hayek's spontaneous order theory is based on the theory of evolution, but there are few works which focus on Hayek's evolutionary concept itself. However, this concept is important for understanding Hayek's social and economic philosophy. In this paper, the concept is clarified through comparison with the theories of H. Spencer, A. Marshall and T. Veblen. The keyfeatures of Hayek's theory are that ; (1) he did not use a biological analogy ; (2) he thought that social evolution should be described as the development of order. Unlike Marshall, Hayek thought that a biological analogy distorted the character of social phenomenon so that the theory of social evolution had to be unique.

In the first section of this paper, an outline of theories of Spencer, Marshall and Veblen is presented, which emphasizes how they differ in how they apply various aspects of the theory of evolution to social sciences. The second section explains Hayek's theory of evolution. In the third section the relation between the theory of evolution and the spontaneous order theory is highlighted. In the last section, the central problem raised up by Hayek is considered.